



2022年8月8日

## 今こそ反戦歌を！〈4〉

### 矢沢永吉、美空ひばり、吉田拓郎 — 8月6日広島の悲劇をめぐる3つの曲 松岡利康

先に8月6日について、もう50年余り前の若き日の記憶から思うところを書き記してみました。今回はその余話といえますか、またはウクライナ危機に触発されて思い出した反戦歌についての続きといえますか、思い出したことを書き記してみます。

8月6日広島の悲劇について次の3つの曲を思い出します。

#### 〈1〉矢沢永吉 『Flash in Japan』

私はこの曲を聴いてショックを受けました。今こそみなさんに聴いて欲しい一曲です。日本のロック界のスーパースター矢沢永吉は広島被爆二世です。これも意外と知られていません。ご存知でしたか？ 父親を被爆治療の途上で亡くしています。矢沢がまだ若い頃(1987年)、『Flash in Japan』という曲を英語で歌い、その映像(ミュージックビデオ)を原爆ドームの前で撮影し、これを全米で発売するという大胆不敵なことをしでかしています。

5万枚といえますから矢沢のレコードとしては少ないのでしょうか、矢沢にすれば原爆を人間の頭の上に落としたアメリカ人よ、よく聴け！ といったところでしょうか。いかにも矢沢らしい話です。このエネルギーが、部下による35億円もの巨額詐欺事件に遇ってもへこたれず、みずから働き全額弁済し復活したといえるでしょう。やはりこの人、スケールが違います。私より2歳しか違いますが、私のような凡人とは異なり超人としか言いようがありません。

アメリカで発売されたこの曲に正式な日本語訳はないようですが、ファンの方が訳されていますので以下に掲載しておきます(英文は割愛)。時間を見つけて、あらためて訳してみたいと思います。

<https://www.youtube.com/watch?v=tJf7u0puYMs>

俺たちは学んだのか  
治せるのか  
俺たちは皆あの光を見たのか  
雷みたいに落ちてきて 世界を変えちまった  
稜線を照らし 視界を消し去った  
戦争は終わらないんだよ 誰かが負けるまでは  
あの空の光は 戦争なのか 雷なのか  
それともまた日本で光るのか  
雨は熱いのか これで終わるのか  
それともまた日本で光るのか  
彼らに何と言えばよいのか

子供たちよ聞いてくれ  
俺たちが全てを吹き飛ばしてしまったが  
君たちは再出発してくれ  
朝なのに今は夜のようで 夜は冬のようだが  
いくつか変わったこともある  
いつも忘れないでいてほしい  
戦争は終わらない 誰かが負けるまでは  
あの空の光は 戦争なのか 雷なのか  
それともまた日本で光るのか  
雨は熱いのか これで終わるのか  
それともまた日本で光るのか  
あの空の光は 戦争なのか 雷なのか  
それともまた日本で光るのか  
雨は熱いか これで終わるのか  
それともまた日本で光るのか

## 〈2〉美空ひばり『一本の鉛筆』

ガラッと変わって、次は昭和の歌の女王・美空ひばりの『一本の鉛筆』です。これはひばりが1974年、第1回広島平和音楽祭に招かれたのを機に作られ、そこで披露された記念すべき一曲です。意外と知られていません。作詞は映画監督の松山善三、作曲・佐藤勝。裏面は『八月五日の夜だった』。

ひばりが広島原爆で被爆したわけではありませんが、父親が戦争に召集され母親が苦勞していたのを見て育ち、みずからも空襲に遭い、彼女なりに戦争を嫌悪し思う所があったようです。

「あなたに 聞いてもらいたい」

「一本の鉛筆があれば 戦争はいやだと 私は書く」

「一枚のザラ紙があれば あなたをかえしてと 私は書く」

「一本の鉛筆があれば 八月六日の朝と書く」

「一本の鉛筆があれば 人間のいのちと 私は書く」

「ザラ紙」とは今では死語ですが、私たちの世代では、これを日々1000枚1包で買い「ガリ版」に「鉄筆」で「ロウ原紙」に原稿を書き「謄写版」で印刷しチラシを作ったものです。ザラ紙と共にガリ版も鉄筆もロウ原紙も謄写版も今はなく死語です。

ひばりは、主催者が用意した冷房付きの部屋を断り、「あの時、広島の人たちはもっと熱かったよね」と言って、ずっと猛暑下のステージ脇にいたとのエピソードがあります。この時の映像が残っていました。 <https://www.youtube.com/watch?v=7Uja44h68Bk>

ひばりはこれから15年後の1988年の第15回同音楽祭に、一人で歩けないような病状で点滴を打ちながら駆けつけ、観客の前では笑顔を絶やさなかったそうです。翌1989年にひばりは亡くなりました。音楽祭自体も20回目の1993年で終了となりました。諸事情はあるでしょうが、ひばりの遺志を継いで続けて欲しかったところです。

最近この時期になると当時の映像が放映されたりクミコらがカバーして歌ったりしていますが、隠れた名曲です。

### 〈3〉吉田拓郎『夏休み』

この歌には諸説あります。私はてっきり原爆投下→終戦後の広島を表現したものばかり思っていましたし、今もそう思っています。拓郎自身もそうテレビで言っていたのを観たという人の情報(ネット情報ですが)もあります。「火のないところに煙は立たない」といいますが、反戦歌(あるいは反戦の気持ちを歌った)といわれるのには、なんらかの根拠があるわけで、どうなのでしょう。 <https://www.youtube.com/watch?v=dvn5N75VBPM>

ところが、拓郎自身が公式サイトでこれを否定し鹿児島で過ごした少年時代のことを表現したのだというのです。しかしこれは拓郎の“照れ隠し”だと思います(と勝手に解釈)。拓郎は広島に原爆が落とされた翌年(1946年)に鹿児島で生まれここで幼少期を過ごし、原爆投下・終戦から10年後の1955年に母親の故郷・広島に移住、市内の被爆の中心地からさほど離れていない所で育ちました。おそらく戦後の焼け跡の酷さを少年時代、青年時代に日々目にし空気を吸って育ったはずです。まだ傷痍軍人が街角にいた時代です。大学を卒業し1970年にプロ歌手を目指し上京するまで広島で過ごしています。そこで見知ったことが拓郎の素地になっているはずです。

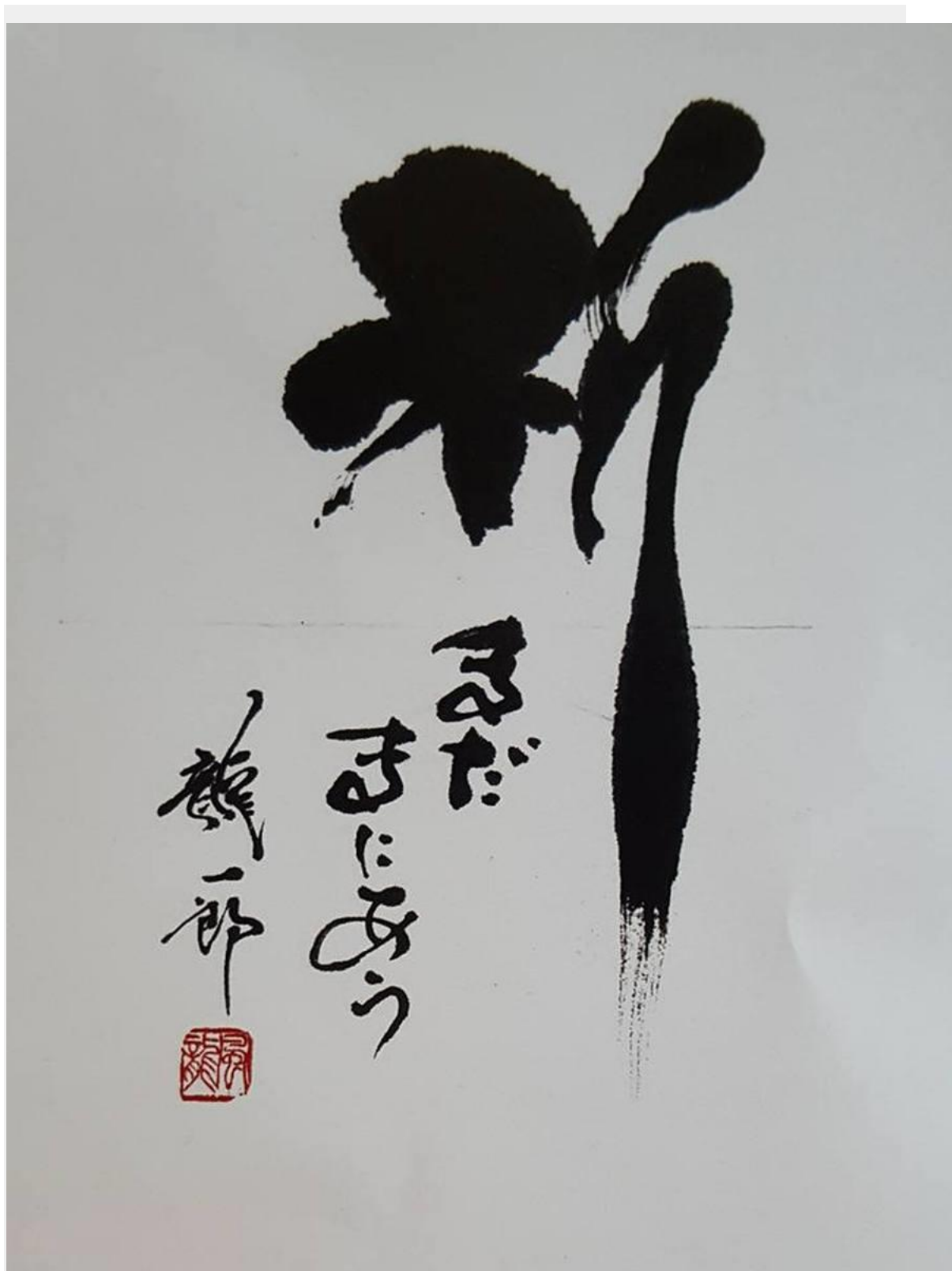
ここでちょっと寄り道。拓郎は1970年(私が大学に入った年でもあります)、上智大学全共闘プロデュースでアルバム『古い船をいま動かせるのは古い水夫じゃないだろう』を自主制作(つまり自費出版のことやね)します。今からは考えられませんが、これをほそぼそと手売りしていたらしいです。当時の社会状況と共に拓郎の想いが醸しだされる凄いタイトルですが、この中から『イメージの詩』をシングルカットし、これがデビュー曲となります。「たたかい続ける人の気持ちを誰もがわかっているなら たたかい続ける人の心はあんなには燃えないだろう」——ここに拓郎の原点があると思いますが、本人はどう思っているのでしょうか？

さて、拓郎の前の「フォークの神様」岡林信康の代表曲の一つ『友よ』は、牧師の息子で同志社大学神学部の岡林が賛美歌を元に作ったともいわれますが、「友よ、夜明け前の闇の中で 友よ、戦いの炎を燃やせ 夜明けは近い」というフレーズに私たちは感銘し、いろいろな集会で歌われました。この曲はそうではないんだと岡林自身が否定しているシーンを観たことがあります。つまり、歌は公にされることで作者の手を離れ社会性を持つということではないでしょうか。ちなみに、岡林は最近この曲を封印しているようです。『山谷ブルース』と共に岡林の代表作なのに残念ですが、名曲ですので、岡林の意とは別に(かつてほど頻繁ではないにしても)歌い継がれていくのではないかと、思います。

また、宮沢和史の『島唄』、宇崎竜童の『沖縄ベイ・ブルース』も、歌詞にはダイレクトに戦争や現在の米軍支配下の沖縄の状況を書いていませんし本人らもあれこれ説明するわけでもありませんが、戦争や現在の米軍支配下の沖縄の状況を表現していることは言うまでもありません。宮沢、宇崎のように黙っていれば値打ちがあるものを。

『夏休み』が反戦歌であるかないかは私にはわかりませんが、聴く者に原爆投下→終戦後の平和な、しかしいささか物悲しい状況を表現していることを感じさせることは確かなことです。初出は1971年に発売のアルバムに収められ、シングルカットは、ずっと先の1989年のことです。

◎[リンク]松岡利康「今こそ反戦歌を！」 <http://www.rokusaisha.com/wp/?cat=103>



龍一郎・揮毫